

日本・アジアのキリスト教——無教会キリスト教の系譜（9）

芦名定道

<前回>オリエンテーション

<演習のスケジュールと場所>

演習日（前期・水3）：4/11, 18, 25, 5/2, 9, 16, 23, 30, 6/6, 13, 27, 7/4, 11, 18

場所：キリスト教学研究室

- ・初回の授業では、本演習のオリエンテーションを行い、演習の目的や進め方を確認する。二回目は、担当者の確定とテキストの配布、そして内村鑑三の聖書論を紹介する（導入講義2）。

三回目以降は、内村鑑三『世界の中の日本』（著作集第4巻、岩波書店）に収録の諸論考を、担当者の解説を通して、順番に精読してゆく。

- ・4/11：オリエンテーション＋導入講義1
- ・4/21：導入講義2＋担当者確定。
- ・演習は4/25より開始。
- ・毎回担当者が、テキストの内容を説明し、問題提起し（テキスト外の資料などを合わせて用いる）、議論を行う。担当者はレジメを用意する。残った問題は宿題とする（次回の冒頭で報告する）。
- ・必要な解説を行う（芦名）。
- ・成績はゼミでの発表（少なくとも一回）によって評価する。

<テキスト>

- ・内村鑑三『世界の中の日本』（著作集第4巻、岩波書店）

<導入講義1>

日本的靈性とキリスト教

——キリスト教土着化論との関連で

（北陸宗教文化学会『北陸宗教文化』第24号、2011年3月、pp.1-18.）

第1章 問題——大拙とキリスト教土着化論——

第2章 靈性とは何か

（1）靈性と宗教

（2）日本的靈性と仏教

第3章 日本的靈性とキリスト教

内村の日本的基督教の議論が、以上の二つのポイントから判断して、大拙の日本的靈性論と類似の論理構造を有していることは明らかである。そこで問われていたのは、内村と大拙が生きた近代日本（両者にとっての現代）における日本的靈性と宗教（キリスト教あるいは仏教）との創造的相互作用の可能性とその意義だったのである。つまり、現代日本における靈性覚醒への寄与という点では、日本のキリスト教も日本的靈性論において大拙が取り組んだものと同じ課題に直面していたと言わねばならない。

第4章 展望

大拙と内村との思想的類似性（第一と第二のポイント）に基づいて考えるならば、キリスト教から見た大拙の日本的靈性論の意義は、日本のキリスト教はいかにあり得るのか、日本におけるキリスト教の土着化はいかにあるべきなのか、といった問いについて、大拙を参照しつつ考察を深めることにあると言えよう。内村が追求した日本的キリスト教は、21世紀のキリスト教の存在意味あるいはその思想的可能性を、日本という場において問う場合に避けて通れない問いである。そして、現代日本の宗教状況が宗教的多元性のもとで理解されるべきことを考えるならば、日本的靈性（日本的宗教性）を仏教との関わりにおい

て追求した大拙の議論は、第一に参照されるべき論考であり、ここに現代キリスト教思想にとっての大拙の思想的意義の一端があるように思われる。

しかし、さらなる展望を開くためには、むしろ通常の日本キリスト教土着化論と大拙の日本的靈性論との相違点が重要になる。注目すべきは、日本的靈性の現実化は、理論的な問いととどまらず、具体的な人間の問題であるという点であり——この点は内村においても確認できるが——、大拙が、鎌倉仏教（浄土系）における日本的靈性の覚醒を論じる際に、靈性を表現にもたらした個人、とくに法然と親鸞の二人を、しかも、個々の一人格を超えた靈性的繋がりを取り上げていることである。日本的靈性は、個人において（「親鸞一人がためなりけり」）、個人を超えて（「超個己性の人」）、そして、人と人との関わり・繋がりにおいて働き、個人を超えて継承される。

「超個の人（これを「超個己」と言っておく）が個己の一人一人であり、この一人一人が超個の人にほかならぬという自覚は、日本的靈性でのみ経験されたのである」（鈴木、1944、82）、「実は法然と親鸞とを一人格と見るのが正当であろう。」（同書、83）

では、この個人的・超個人的な靈性の自覚は、どこにおいて可能になったのであろうか。大拙は、この問いに対して、先に論じた「大地性」という観点から答える。

「法然上人——親鸞聖人——の靈性的経験は実に大地から獲得せられたもので、その絶対的価値は亦此に在るのである。」（同書、83）

ここで示唆されるのは、天才的な宗教的個人の個人としての働きが宗教の土着化を可能にするのではなく、むしろ、決定的なのは、民衆の生活の現場である「大地」との真実な関わりであるということなのである。この大地性への注視は、次の引用にあるように、内村においても読み取ることができるかもしれない。

「イエスはわたしを世界人とし、人類の友とする。日本はわたしを愛国者とし、それを通して固くわたしを地球に結びつける。」（307）

ここで内村が指摘する地球は大地と無関係ではない。しかし、内村以外の、あるいは内村以降の日本のキリスト教——内村と同様に日本的キリスト教を提唱する内村の直弟子矢内原忠雄も含めて——はどうだろうか。確かに、キリスト教の土着化はしばしば理論的に論じられ実践的な取り組みが試みられてきた。しかしながら、その場合に、日本のキリスト教はどこに根ざすべきものと考えられてきたのであろうか。これまでの日本のキリスト教は、大地に根差すどころか、結局大地から遊離した状態に陥ってはいないだろうか。⁽¹⁵⁾ 大拙が論じる鎌倉仏教と、日本的キリスト教で論じられるキリスト教土着論との決定的な相違と、前者から後者が学ぶべき点は、大地性への眼差しにあるように思われる。

<導入講義2>

アジア・キリスト教・多元性『アジア・キリスト教・多元性』第16号、2018年。

内村鑑三と聖書

1 はじめに

内村鑑三にとって、聖書は最重要の関心事であり、聖書研究に基づく伝道は内村のライフワークと呼ぶことができる。⁽¹⁾ したがって、内村のキリスト教思想を論じる上で、内村の聖書理解を明らかにすることはその前提に属すると言わねばならない。これは、内村

から無教会キリスト教を継承した弟子たちにおいても同様であり、聖書研究抜きには、無教会キリスト教を理解することができないであろう。

しかし、内村の聖書論を検討することの意義は、以上にとどまらない。というのも、内村鑑三のキリスト教は、近代西欧におけるキリスト教の形態、つまりキリスト教における個人化の傾向性（聖書はそこで決定的な位置を占める）の典型例と解釈することが可能であり、その点で、近代キリスト教の特性を論じる際に、内村の聖書論を理解することは重要な手がかりを与えてくれることが期待できるからである。

本稿においては、こうした問題意識にしたがって、内村鑑三の聖書理解を検討することが試みられるが、扱われる文献は、『内村鑑三選集7 聖書のはなし』（岩波書店、1990年）に所収のものに限定されており、また参照される先行研究も決して十分ではない。⁽²⁾ その点で、本稿の議論は研究ノートの範囲にとどまることをご了解いただきたい。しかし、内村鑑三の聖書理解について、その概要を明らかにすることは、内村研究にとっても必要な作業の一つと思われる。

以下においては、まず、内村鑑三が聖書の基本的特性をどのように理解していたのかについて論じる（「2」）。これを内村鑑三における聖書本質論と呼ぶことにしたい。次に、内村が聖書をいかに読み・解釈し・研究しようとしたかが考察される（「3」）。これは、内村の聖書解釈学に相当するものである。これらの内村の聖書論の内容に関わる議論に続いて、聖書論のコンテクストが論じられる（「4」）。これによって、内村の聖書論についての理解がさらに深められるであろう。そして、最後に以上の考察から明らかになる事柄を展望することによって、本稿を結びたい（「5」）。

2 聖書本質論

2-1 聖書の二重性

「神の聖旨を人の手を以て写したものの、是が聖書であります。・・・聖書は神の心を伝へた書であります。」(2/26)

内村の聖書理解の基本は、聖書が「人の手」と「神の聖旨」の二重性を持つ、という点に認められる。「神の聖旨」は「神の心」「神の言」「神の言辞」「聖書の精神」「聖書の理想」などとも言われるが、しかし、聖書も「人の手」によるものであるかぎり、齟齬や内的矛盾、誤謬を免れていない（聖書の不完全性）。したがって、聖書が神の言であり、無謬であると言う場合（聖書無謬説）、それは説明を必要とすることになる（25/227）。内村のテキストには、「聖書は不完全である」（「聖書の無謬説を唱ふるのではありません」（28/313））と「聖書は無謬である」（「余は聖書無謬を信ずる」（25/226）、「事物の宗教的意義を示す上に於て聖書は少しも誤りません」（7/91））という一見、矛盾した主張が見られるが、これは聖書の二重性のいずれに焦点を当てるかによって生じたものと解することができるであろう。さらに、この聖書の二重性（神の言にして、人間の言）は、神学的には、キリスト両性論に基礎づけられると言える。⁽³⁾ 今回取り上げた文献の範囲では、このキリスト論を内村がいかに理解しているかは不明であるが、内村がナザレのイエスと再臨のキリストの両方を視野に入れていることは、本稿の以下の論述からも明らかであろう。

2-2 聖書自体は崇拜対象ではない

二重性において理解された聖書は、内村においては、教会（教派の組織・思想・儀礼など）に優先すると考えられる。もちろん、歴史的には聖書が教会において形成されたことを、内村も認めている（18/181）。しかし、「聖書は教会に拠って立つ者ではない、教会が聖書に拠って立つ者である」（10/126）とされるが、これは歴史的なキリスト教会や伝統的な諸教派への批判、あるいは聖書によるそれらの相対化（16/170）を意味する。ここに、宣教師への依存からの脱却と共に、内村の無教会主義の立場を確認することができる。⁽⁴⁾ した

がって聖書研究は、教派的伝統から自由に行われる「自由研究法」(10/127)でなければならない。

しかし、ここに、教派主義の「聖書教」(聖書という書物の崇拜)への置き換えといった主張を読み取るべきではない。⁽⁵⁾これはすでに見たように内村が単純な聖書無謬説を取っていないこと、また以下論じるように近代聖書学における科学的分析的な聖書学を一定の範囲内ではあるが、高く評価していることにも現われている。さらにここで確認すべきは、こうした聖書の相対化が、キリストとの関わりでなされていることである。

「キリストが解るまでは聖書は解らない、キリストは聖書の精神であって、聖書以上である」(8/108)、「聖書はイエスキリストに就て証する者なること」(9/112)、「聖書の要点はキリストの十字架に在ると云ひて正鵠を失はないと信ずる」、「それは活けるキリストである。」(27/309, 310)

この聖書の主人公としてのキリスト(14/150)は、聖書という書物を超えた、人類的また宇宙的な実在(「人類宇宙通有の生命」(19/186))であって、聖書研究の目的はこの生命であるイエスを聖書を通して知ることにある(19/186、14/151)。したがって、イエスの生命は「恒久不変」であっても、書物としての聖書自体は永遠ではない——「天国に在りては聖書は要らない」(14/151)——。キリストが聖書を超えるということは、「神の言辭は旧約三九卷新約二七卷位にて書き尽されるものではありません」(4/66)と言い換えることもできる。以上の議論は、キリスト(神の言葉)は聖書に優越し、聖書は教会に優越するとまとめることができるであろう。

2-3 聖書テキストの統一性

書物としての聖書がキリスト教共同体において形成された諸文書の集成であることは、内村の聖書理解の前提である。「是れは文集でありまして文学であります」(9/109)。これに類似した主張は内村のテキストの随所に見られるが、ここで生じる問題は、では、聖書は単なる「寄せ集め」(9/109)、「偶然に一書して綴られた書」(9/111)に過ぎないのか、ということであり、とくに問題となるのは、聖書の統一性である。以下において、まず、聖書の統一性を内村がどのように論じているのかを、次にその統一的な聖書の内容がいか

に説明されているのかを確認してみよう。

まず、聖書の統一性であるが、内村は、新約聖書の読み方の多様性を認めている。「其見方の異なるは見る立場と人とは異なるからである」(14/150)というように(cf. (2/47))、この読み手、解釈者との多様な関係を離れて、その意味で客観的な仕方で、66の文書からなる聖書の統一性を論じることにはできない。問われるのは、「聖書六十六巻は一つの完備せる書である、之を一つのオルガニズム即ち有機体として見る事が出来る」(27/308)という場合の、「～として見る」という解釈学的視点である。⁽⁶⁾これを内村は、聖書の精髓、要点、中心と呼んでいる。もちろん、理解しようとする対象を統一的に把握する視点としての中心は、客観的に存在するわけではなく、内村にあっては、それは、聖書の諸文書の中心を活けるキリストとして把握すること(=信仰)によって、始めて可能となると言わねばならない(聖書は「信仰的に見れば完全無欠の書」、「聖霊に由りて」、神の事を知る機能としての「良心」「改悔めたる心」(11/132))。ここで我々は、次に論じる聖書解釈学の問題に踏み込むことになるが、聖書の統一性とは、読み手の実験において確証されるもの、つまりテキストの中心と読み手の視点(信仰)との相関関係の問題と言えるであろう。したがって、読み手の関与と切り離して統一性が存在するわけではないのである。しかし、それは信仰者個人の主観の産物であることを意味しない——討論可能な相互主観的な構造を有するという点で——。内村の聖書理解は、内容的に現代の解釈学の問題に密接に関わり合っていると見えよう。⁽⁷⁾

次に、統一的に把握された聖書の内容であるが、内村は、通読によって大略を知ることの必要性を指摘するだけでなく(2/34-35)、様々な観点から、その統一性を具体的に論じている。ここでは、内村の聖書神学の内容には踏み込まず、後の議論に必要な範囲で、いくつかの論点を紹介するにとどめたい。

たとえば、内村は、伝道という視点から、人々をキリスト教に回心させるための戦略として、新約聖書を「艦隊」にたとえている(17/178)。つまり、聖書の諸文書は、一様な統一性において見られるのではなく、構造的な統一性(有機体)として捉えられるのであり、特に内村は、三という数によって、聖書の思想構造を様々な観点から分析している。

(a) 「三条の金線」としての信、望、愛(6)

「三条の金の糸が聖書を其始めから終りまで貫いております。」(6/80)

(b) 新約聖書の思想的な「三系統」としてのヤコブ系、パウロ系、ヨハネ系(14)

「使徒ヤコブは実践的である、使徒パウロは信仰的である、使徒ヨハネは心霊的である」、
「モーセの律法は根である、ヤコブの基督教は幹と枝とである、パウロの基督教は葉と花とである、而してヨハネの基督教は熟したる実である。」(14/143)

(c) 聖書の「三つの部分・分子」としての歴史、教訓、預言(15)

「聖書は三つの部分より成る、其第一は歴史である、其第二は教訓である、其第三は預言である」、「聖書は其全体の組織に於て三分的である」、「歴史的分子」、「教訓的分子」、「預言的分子」(15/152-153)

(d) 「三条の縄」(24)

「聖書は歴史であり、実験であり、預言である。」(24/217)

まず、(a)は、いわゆるキリスト教的三徳という観点から議論であるが、注目すべきは、この三徳が、旧約から新約のすべてのテキストの三重構造を示すものであるとともに、信仰から希望、そして愛へと進む「信仰的生涯の順序」(6/81)に対応している点である。テキストには、共通構造(三重構造)と強調点における進展(多様性とその系譜)が存在し、それが、さらに信仰者の信仰プロセスと相関しているのである。同様の構造は、(b)では、キリスト教の歴史的展開というレベルとの相関において論じられる——ヘーゲルの影響による初期キリスト教の発展図式(バウアに指導されたテュービンゲン学派)との対比は興味深い。ペテロからパウロ、そしてヨハネへ——。この聖書の三分子は、新約聖書の諸テキストを系統づける構造であると共に、「神の黙示」の「漸進的」な進展——ユダヤ人から異邦人、そして全人類へ——を示しており(14/143)、こうして読み手は、漠然と聖書を通読するのではなく、「我等は先づ聖書を其思想の系統に循つて究むべきである」(14/149)と勧められるのである。

次に、(c)と(d)であるが、これらは、基本的に同一の視点からの議論であり、旧約聖書学で言う、律法・歴史文学、知恵文学、預言書という文学ジャンルに相当するものと言える。しかしここでも、議論のポイントは、あるテキストがどのジャンルに属するのか、ということよりも、すべてのテキストが三つの「分子」を有することに置かれている。内村が強調するのは、通常歴史や教訓として区分されるテキストが預言でもあるということであり、具体的には、「山上の垂訓」はこうした点からその預言としての意義が詳しく論じられている。また、歴史、教訓、預言は、聖書の時間構造(過去、現在、未来)を表現している点にも留意すべきであろう。「過去の事実(歴史)に其基礎を置き、未来の希望(預言)に其実現を期する道徳である」(15/152)。聖書の統一性とは、聖書の正典的理解に属するものであるが、それは聖書特有の構造的性においてなり立っているのである。

3 聖書解釈学

3-1 インスピレーション

3-2 近代聖書学、その役割と限界

3-3 実験における理解

3-4 内村における聖書学の内容

3-5 聖書の思想と諸学問

4 聖書論のコンテクスト

4-1 思想的コンテクストとしての近代日本・日本人

4-2 内村の思想的変化と歴史のコンテクスト

5 むすび

キリスト教が西欧的な近代社会の成立基盤となったことについては、すでに多くの議論がなされてきているが、キリスト教は西欧的な近代社会においてさまざまな変容を経験した。本稿の冒頭で述べたように、その変容の一つに挙げられるべきは、近代キリスト教の個人化であろう。この動向は、宗教改革によるキリスト教的世界の分裂と近世の宗派化・属地主義を経て、近代的な人権としての「信教の自由」（＝宗教的寛容）とその制度化としての政教分離システムの成立へと進む過程を通して進展し、現代に至っている。⁽²³⁾ 内村鑑三が設立した無教会キリスト教は、この近代キリスト教の個人化の動きの中に位置づけることが可能であり、⁽²⁴⁾ それを端的に示すのが「聖書研究」という活動にほかならない。無教会における聖書研究は、共同体における共同の聖書読解という性格を保持しつつも、この共同体に属する個々人が聖書を自分で読み理解するという宗教改革的な聖書主義（「聖書のみ」）の到達点の一つと解することができる。すべての個人が自らの力で聖書を読み自らの信仰を具体化するという聖書との新しい関わり方は、例外的な場合を除いては、近代以前には存在し得なかったものである。無教会キリスト教は、以上のような点で、近代以降のキリスト教がいかなる形態において存在できるのかという問題を考えるための、いわばモデルケースとなり得るものなのである。内村鑑三の聖書論は、内村のキリスト教思想の重要テーマであるだけでなく、近代キリスト教思想を掘り下げて分析する手がかりと言える。本稿では、この問題については、ほとんど論究することはできなかったが、今後、近代キリスト教における無教会の意義という問いに向けた議論の展開が必要になるであろう。

<引用文献について>

本稿で用いる、(a/b) という表記は、文献表の a 文献の b 頁（『内村鑑三選集7 聖書のはなし』の頁）を、つまり、たとえば、(1/4)は、文献表の第一番目の文献「文学としての聖書」の4頁を意味している。なお、引用に際しては、一部の表記を現代表記に改めた。

- (1) 文学としての聖書（明治31年3月28日）
- (2) 聖書の話（明治33年9月30日～34年1月22日）
- (3) 聖書（明治33年12月21・23・27日）
- (4) 聖書は如何なる意味に於て神の言辭なる耶（明治35年4月20日）
- (5) 余の聖書（明治35年6月14・15・16日）
- (6) 三条の金線（明治36年4月23日）
- (7) 聖書は果して神の言なる乎（明治37年1月21日）
- (8) 聖書とキリスト（明治37年9月22日）
- (9) 聖書の真髓（明治37年11月17日）
- (10) 大阪講演の要点（明治39年12月10日）
- (11) 聖書の研究法に就て（明治40年3月10日）
- (12) 健全なる聖書研究（明治40年5月10日）
- (13) 高等批評に就て（明治41年9月10日）
- (14) 新約聖書に現はれたる思想の系統（明治43年12月10日）
- (15) 新約聖書の預言的分子（明治44年5月10日）
- (16) 聖書研究の話（明治44年8月10日）

- (17) 艦隊として見たる新約聖書（大正元年 11 月 10 日）
- (18) 聖書は如何にして成りし乎（大正 5 年 4 月 10 日）
- (19) 聖書研究の目的（大正 5 年 5 月 10 日）
- (20) 日本に於ける聖書の研究（大正 5 年 6 月 10 日）
- (21) 聖書の読方（大正 5 年 11 月 10 日）
- (22) 聖書の欠点（大正 6 年 1 月 10 日）
- (23) 聖書の預言的研究（大正 7 年 1 月 10 日、2 月 10 日）
- (24) 三条の縄（大正 7 年 6 月 10 日）
- (25) 聖書全部神言論（大正 7 年 11 月 10 日）
- (26) 聖書無謬説に就て（大正 8 年 9 月 10 日、10 月 10 日）
- (27) 聖書の中心に就て（昭和 3 年 8 月 10 日）
- (28) 聖書と基督教（昭和 3 年 8 月 10 日）